

草庵仏教

第221号
(発行日)

2008年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

チユンダの供養

「大パリニツバーナ経」によると、老いた積尊は王舎城から出発して、故郷のある北に向かつて最後の旅に出られ、途中パーヴァ村で鍛冶屋の子のチユンダからキノコ料理の供養を受けた。しかし、そのキノコにあたって激しい下痢の痛みと出血が起こり、急速に体力を消耗し、積尊はついにクシナーラの林の中で臨終を迎えることになった。

チユンダは、積尊への尊崇の念で食事の供養をしようとして珍味のキノコ料理をさし上げたが、結果積尊の死を早めるに至った。

積尊は、チユンダが後悔して嘆くであろうし、またまわりの者たちがチユンダを責めるようになるであろうと、チユンダに同悲され、「私の生涯で二つのすぐれた供養があった。その供養はひとしく大いなる果報があり、大いなるすぐれた功徳がある。一つはスジャータの供養の食物でそれによって私は無上の悟りを達成した。そしてこの度のチ

ユンダの供養である。この供養は、煩惱の全くない涅槃の境地に入る縁となった。チユンダは善き行いを積んだ」と仰せになった。

最初のスジャータの供養とは、積尊がさとりを開かれる前、極限にいたるほどの苦行をされていたが、極端な苦行は悟りへの益なきことを知り、それまでの苦行を捨て、村娘のスジャータから乳粥ちちかゆの供養を受けられた。それによって体力を回復し、菩提樹の下に座り、「悟りを開くまではこの座を決してはなれない」という決意でもって坐禅瞑想に入られた。そしてこの上ない悟りを開かれたと伝えられている。スジャータの供養は悟りに至る尊い縁になったのである。

そして、このスジャータの供養の功徳とひとしく、このたびのチユンダの供養は大いなる涅槃に至る尊い縁となると積尊はチユンダの食物の供養を讃えておられる。

チユンダがさし上げた特別のキノコはどうやら食用に適さなかったようである。しかしチユンダは自分のせいで積尊を死に至らしめたという後悔をするだろうし、また周りの僧侶がチユンダを責めるであろうと積尊は思われ、チユンダの嘆きによりそって、「チユンダは大いなるすぐれた功徳を積んだ。チユンダの供養で私は煩惱の残りなき大いなる涅槃に入ることになった。チユンダは善いことをした」とチユンダの供養をほめ、起るであろうチユンダの嘆きと周りからの責めをあらかじめ取り除かれたのである。

ここに積尊の慈悲の深さ、同悲のお姿が伺われる。仏教で言われる慈悲の行いとは具体的にどういふものなのかよく示されている。

しかも積尊のチユンダへの言葉は無理にチユンダを慰めているというものではなく、ご自分の死を「大いなる涅槃に入る縁」と見られてのものである。ご自分の死んでいくことに対して、不幸ともいわず、嘆きもせず、静かに受け止められるばかりではなく、煩惱が全く消滅する大涅槃に

入る尊い縁として見ておられるのである。そういう背景があつてチユンダの供養を讃えておられるのであつて無理にチユンダを慰めているのではなからう。

このことによつて教えられることは、自分にふりかかるどのような「災厄」さいやくをも、転悪成善(悪を転じて善と成す)で、善き縁であると受け止める智慧があつて、初めて他者への憎悪や責める心から解放されるのである。もし、自分には内心で嘆いているけど、人を悲しませてはいけないという愛情であれば、それはそれで尊いとしてもなお暗いものがある。

このように積尊はご自分の死を大涅槃の悟りに至る機縁と見られたが、この積尊の死の意味は、浄土の教えを信じる者における死の意味と重なるものである。自らの死を大涅槃界である浄土に生まれる縁といただいている念仏の信心と、積尊における死への智見とは、内面的に連なるものがある。真実の信心は、死をも浄土へ生まれる縁であるとの智見を生むのである。

正信偈に学ぶ問答

(十)

五劫思惟之撰受 重誓名声聞十方

(正信偈書き下し)

五劫に之を思惟し撰受せり。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

(現代語訳)

五劫もの長い間思惟してこの誓願を選び取り、名号をすべての世界に聞こえさせようと重ねて誓われたのである。

*

G 「重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと」についてですが、この意味は名号(名号)が十方の衆生に聞こえるようにと、重ねて法蔵菩薩が誓われたということですね

D 「ええそうです」

G 「どこにそれは説かれてますか」

D 「大無量寿経の四十八願文の中の第十七願に

たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。

とく咨嗟して、我が名を称せんとあつて、十方世界の無数の仏様たちに、私の名すなわち南無阿弥陀仏の名号をほめたたえられ、称えられたい、と誓われました。咨嗟というのはほめることです。それは阿弥陀仏がご自身の名譽を求められたのではなくて、一切衆生が、無数の仏たちが讚歎し、説法し、称えられている南無阿弥陀仏の名を聞いて、自分たちも、この南無阿弥陀仏を

いただいた称えるものとなる、いわば念仏の人たらしめたいとの法蔵菩薩の願いなのです

G 「一切衆生に南無阿弥陀仏を与えて称えさせ聞かせたいために、無数の諸仏によって南無阿弥陀仏の名がほめられたいと願われたのですね」

D 「ええそうです」

G 「そのことをもう少し具体的に話してください」

D 「たとえば、お寺である先生が南無阿弥陀仏の有難いこ

とを説法される。そのお話をあなたが聞いて、それじゃあ私もお念仏を申し、お念仏を信じましょうということになれば、その先生は諸

仏のお一人のような方といつていいでしょうし、あなたは諸仏の名号讚歎によってお念仏を申すようになったといえ

ましよう。それは阿弥陀仏の御名が十方世界の一人であるあなたに与えられたというこ

とであり、その先生が名号(名聲)をほめてくださる(咨嗟)ことによって、衆生(あなた)に名号が与えられ聞かしめられたことになりましょう」

G 「法然聖人や親鸞聖人の教えを学んで、それじゃ私たちもお念仏をいただきましょうとなりませぬ。そうするとそれは法然聖人や親鸞聖人という諸仏が南無阿弥陀仏の徳を

ほめたたえる、いわば讚歎することによって、私たちがお念仏をいただくようになるというので、これが第十七願で願われていることなのですね」

D 「ええそうです」

G 「そうすると、諸仏善知識によって名号が衆生に聞きとどけられるようになるのは、

法蔵菩薩の第十七願に依えての諸仏の名号讚歎(説法など)なのですね」

*

D 「そうなんです。もとは第十七願のお働きによってといえましよう。しかも親鸞聖人は、お念仏を称え、お念仏を信じる人は諸仏にひとしいお方だと仰せになっています」

G 「どうしてですか」

D 「お念仏を受けとつて、ああ有難いとお念仏を申し、人にもお念仏をお勧めをする、それは諸仏がお念仏を咨嗟する(ほめたたえる)行いにつ

らなるものですから、煩惱具足の身であつてもお念仏を信じて称える人は、お念仏を周りの人に与えていることになり、諸仏のお仕事に参加して

いるともいえるので、お念仏をいただいた人は諸仏にひとしいという意味があると仰せられています」

G 「第十七願によって私たちがお念仏をいただくようになる

ことはわかりましたが、ここでは(重ねて誓う)と仰せられています。なぜ(重ねて)といわれるのですか」

D 「法蔵菩薩は第十七願の意をさらに重ねて誓われているからです」

G 「それはどこに示され、またどういう内容ですか」

D 「四十八願の願文の後に、重誓偈という偈文があります。その中に

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。

究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」

とあります。これは、法蔵菩薩は、私が仏になった時、十方の生きとし生けるものに南無阿弥陀仏の名号を与えて聞かせたいと誓われたもので、これは第十七願に重ねての誓いといわれるのです」

G 「なぜ重ねて誓われたのでしょうか」

D 「非常に大事な願だからです。私たちに名号を与えてくださる願ですから。それによ

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(土) 午後二時始まり

大谷大学名誉教授

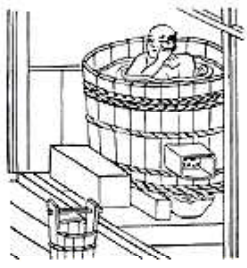
幡谷 明 先生

雑記帳

って私たちは名号をいただいで称え、信受するようになるのです。たとえば私は難病の患者とします。ある慈悲深い勝れた医師がいて、その難病の患者を助けたいと思って永年研究に研究を重ねて特效薬をつくってくださったとします。しかし、特效薬を作っても、それを難病の人に与えて飲ませなければ、難病は治りません。そのように、私たちが浄土に生まれる因は法蔵菩薩の願行（修行）によってすべてできあがっても、それを衆生に与えなければ衆生はいつまでも助かりません。それゆえ、衆生が助かる特效薬の名号を一切衆生に必ず与えようとの願が第十七願ですから、これは非常に大事な大悲の願です」

G 「だから重ねて誓われたのですね」

D 「ええそう聞かせていただいています」



据風呂
(C)SHOGAKUKAN
INC.

(了)

ある家のご法事で「人間死んだら終わりか」に関する法話をした後、参列者の人たちと雑談になった。ある八十歳ぐらいのご老人が、「八割ぐらいの人が死んだら終わりと思っている」と語られたが、実際そうかも知れない。先日も東本願寺の同朋会館の研修に行ったとき、青森から来ていた住職さんに「あなたご自身は死んだらどうなると思えますか」とお尋ねしたら、沈黙されて何もお答えにならない。また若い僧侶で真宗教化にたずさわっている人に同じ質問をしたら、「死んだら何も無くなる」という返事が即座に返ってきた。一般の人の答えならまだしも、真宗教化の frontline にいる人の応えが、この問いへの答えが世間一般の人の答えと変わらないとすれば、これは浄土真宗の教化現場において大きな問題ではなからうか。テレビの昼のワイドショーなどで、芸能人の葬式に参加した人などがよく「天国でゆっくり休んでください」とか「天国でまた合いますよ」とかの談話を述べたり、あるいは最近「千の風になって」

の言葉がはやったが、これら世間で軽く語られる言葉と、お説教で「人間は死んだら浄土に生まれるんですよ」とか「大いなる阿弥陀のいのちに帰るんですよ」と語られる言葉とが、さほど変わらぬように、聞法に来ている人たちには響いているのではないかとさえ思われる。ワイドショーなどでの「死んだら天国」云々の話は言ってる本人も聞いている人も真剣に受けていているわけではなくて、一種の慰めとして聞いているが、真宗で「浄土に生まれるんですよ」「阿弥陀のいのちに帰るんですよ」という言葉も、そう話している説教者もそれを聞く聞法者もどれほど実感として語られたまいた聞いているのであろうか。そして、この問題に立ちただかるのはやはり「人間は死んだら一切終わりである」という考えである。この考えに対してどう反論するか。それがまだ真宗学会、あるいは仏教学会で真面目に取り上げられていないように思うのである。勿論、上座部や唯識の仏教には伝統的な答えがある。無明がある限り、目には見えない五蘊が相続するとか阿頼耶識が相続するとかいわれているが、そういう説が現代人を納得させるだけの説明となっ

ているかどうか問題である。その点の思惟がまだまだ足りないと思う。日本で仏教を学ぶ人は多いが、死後に五蘊が相続するとか阿頼耶識が相続するといふ説を学んでもそれが自分自身の実際の人生観あるいは世界観に組み込まれていくかどうか。単なる「仏教学」いわば学問として学んでいるのであって、学んでいるその人の身に付いた世界観になっていない場合が多いのではないか。その点、チベットの仏教を信奉している多くの人々は死後どうなるかについて仏教の教義を自身の世界観にしているように思う。仏教をみずからの世界観として身につけるならそれが本筋ではなからうか。しかるに「伝統の仏教ではそういつてはいいけど、自分自身は死んだらやはり終わりと思えない」というような受け止め方が日本の仏教者にすらしばしばみられるとすれば、それは大きな問題である。しかも、こういう問題があること自体がまだ充分

自覚されていないのが現状である。近代ヨーロッパの哲学の歴史は執拗に「魂の不滅と神の存在証明」の問題にいどみ、デカルトもカントもヘーゲルもこの問題と対峙してきたといわれる。それは、人間が死んだら一切終わりなら、このような問題提起をする必要はないが、そうではないことをなんとか証明しようとするいとなみでもある。仏教はキリスト教やイスラーム教に比して哲学的な宗教であるといわれ、それは合理的にものを考える現代人にとって仏教の強みであるといわれている。それなら「人間死んだら終わり」とする考えにどう対論するのか、それにどう答えていくのかをもっと仏教学徒は思惟すべきであろう。なぜなら、今日の日本人を宗教から遠ざける大きな壁になっているのは、この「人間死んだらすべて無になる」という漠然としているがしかし心の根に張り付いている考えだからである。(了)

《一言法語》 佐々木蓮磨

見識は傲慢の美名、品格は虚栄の美化。

懺悔告白にも銜氣（みせびらかし）が伴い、大言壮語にも稚氣がある。

信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》九
太字は松並さんの言葉。

*

○或るお方、
「私の助けられる道は、念仏より外に
ない」

と。あとを言わずに（即ちこの念仏は
如来様の呼び声とゆう事を）念仏や念
仏やと言うから、私が念仏する念仏す
るになつてくる。

南無阿弥陀仏が活いきほ仏、お呼び声と、
説いて聞かすお方がないから皆迷うて
いる。仏のなさしめたもう念仏を、私
が念仏する念仏にしている。念仏とは
仏様が私を、念じて下されてある事を
念仏という。私が仏を念ずる事でない。

（お念仏が大事であるとか、（ただ念
仏して）とまでは始終聞かせてもらう
が、この念仏が「汝を助ける」と喚び
たもう声の仏とまでと聞かされぬゆ
え、「ただ念仏して」が私の側の行に
なつてしまう。仏が私を念じたもうの
を念仏という）

○私には私の仏様が付いてござる。息
子には息子に、嫁には嫁に、何にも思
うことはいらぬ。いつかは流れ出る南
無阿弥陀仏。

（阿弥陀様のついておられない人は一
人もいない。生きてる人ばかりではな
い、亡くなったものにもついておられ
る。そして一人一人の救いを担つてく
ださっている。今は気がつかなくても、
今はお念仏しなくても、いつかはきつ
とお念仏が流れてくださり、ともにま
します阿弥陀様、助けてくださる阿弥
陀仏に気がつく）

○お念仏は出そうにない口から出て下
さる。

（無仏法、無信心、謗法ほうぼう闡提せんたいの、三悪
道からやつと出てきた者に念仏など出
るはずがない。にもかかわらずお念仏
が出てくださる。阿弥陀様の大悲に念
じられ働かれて出てくださるお念仏で
ある。不思議、不思議の南無阿弥陀仏。
有ること難い出来事。ようこそようこ
そ南無阿弥陀仏）

○阿弥陀さんから信心もらうのでな
く、阿弥陀さんをもらう。阿弥陀さん
から念仏もらうと、思っていたが、念
仏が阿弥陀さんであった。南無
阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（信心をいただくというのは阿弥陀さ
んの（もの）をいただくのではない阿
弥陀さんご自身をもらうこと。もらつ
てみれば、阿弥陀仏さんは私を超えて
いる。超えていながら私に内在してい
る。不思議である。私の中に入りたも
うとともに私を超えて私を包んでい

る。人においてこれほど広大な尊いこ
とはない）

○久志本様の病床を訪れました時、色
々のことを思い、亦お慈悲の尊さをし
きりに語られる、その帰途、浮んだこ
とを認めて送りました。

先日は有難うございました。南無
阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。日々夜々、

念々の思い、今日今時の所作まで、算
用が済んで成仏しました姿こそ、今
の南無阿弥陀仏なれば、思い思う心は、
皆々おまけじやがな。これ以上だだを
こねますと、南無阿弥陀仏様がいか
にもお気の毒やで、今呼んでもらうだけ
でまけて上げては如何ですか。ちぎれ
ちぎれの南無阿弥陀仏、いやいやのま
まの念仏、念い出させての南無阿弥陀
仏、南無阿弥陀仏と聞くだけで、まけ
てもらいましようまいか、うまい事や、
こんなことに、誰がした、南無阿弥陀
仏。

弥陀が来て 弥陀が連れゆく 弥
陀の国 弥陀の国なら おいらの国さ
おいらの国なら弥陀の国

久志本様

（松並さんはこの文句がふつと浮かん
だといわれる。畏れ入るばかりである。
これに私がコメントをさしはさむこと
はこのお手紙に傷をつけかねない。弥

陀が来て、弥陀が連れゆく弥陀の国
の詩、毎日口ずさまずにはおれない）

○落ちると見込んで下されたのも仏様
なら、その者を助けると成就して下さ
ったのも仏様なり、南無阿弥陀仏なり。
箸持はしつ世話もいらぬ。口にねじこんで
もろうていながら、いるのに吐き出す。
とにも角にも今の我が身の仕合せを仰
ぐばかり。

（助からぬ私とは私の方では知れぬ。
南無阿弥陀仏を聞かせていただいてや
つと知れてくる。しかも助からぬ私を
助ける南無阿弥陀仏となつてくださつ
た。信じる力のない、聞く力のない、
愚鈍な私の口にねじ込んでまであたえ
まします南無阿弥陀が、私を助けたも
う阿弥陀様。まるまるの他力である）

○念仏申すもの、必ずしも信ありとは
言えぬ。然し真信心には必ず名号を
具す。助けて下さる仏様が南無阿弥陀
仏にて、私の往生間違いないと「信」
じてござつたら、私にあらためて、も
う一つ信心は必要ないでしょう。「無
上宝珠の名号と真信心一つにて」と
仰せられてあります。

（汝を助けるに間違いないと信じ切つ
てくださっている金剛のおまこと、そ
れを南無阿弥陀仏とお聞かせいただ
く。そのお心に、私の思いや私の考え
や私の信心をさしはさむ要はさらさら

ない

了